

## 小学生と大学生の共同による旋律づくり・伴奏づくりの実践研究

平 出 久美子\*・森 下 修 次

### 1 はじめに

新潟大学教育学部音楽教育専修の学生は新潟大学附属長岡小学校等において、教育実習とは別立てで学生が児童に授業をする活動を継続してきた。同学生向けに開講されている課題解決実践型授業「音楽教育実践入門」及び「音楽教育実践」が主な授業である。伊野(2021)によると、本授業は、1年生から4年生まで参加できる学年縦割りの選択科目であり、教員養成段階において求められる実践的指導力の育成を目指すものである。授業のねらいは、小中学校等教育現場での音楽教育活動の企画、運営を通して、音楽教師にとって必要な実践的指導力を総合的に育成することにある。その特徴は、小中学校等の教育現場の音楽教育活動について、現場教師と共同し、学生が主体となって企画、運営することにある。教材開発、教材研究、音楽活動の組織、授業や演奏会の企画、学校との連絡・交渉、子どもの実態把握と交流、コミュニケーションや協働的な学びの方法等について、体験を通して総合的に学び、音楽教師として必要となる基礎的な力を身に付けることにあるとしている。さらに、卒業研究では、附属学校の利点を生かし、幼稚園児から小学校低学年児童を対象にしたリトミック授業を、幼稚園と小学校で同じ指導案で実践し学びの様相を比較したり、小学校3～5年生を対象に同じ指導案で歌唱の授業を実践し学びの様相を比較したりする活動など、幅広い分野で連携を継続してきた。児童は、大学生との授業をととても楽しみにしており、意欲的に学習に取り組む姿が見られ学習効果が上がることを実感している。

持田・金子・林(2019)は、児童と大学生がグループを組み、共同作業をすることで、児童は人と共同する大切さへの気付きが促される。また、大学生は準備時間の設定、実践、振り返りなどのPDCAをすることで、大学生同士が共同する大切さに気付く。また、大学生は同じグループ同士でも、児童がいることで共同意識が深まることが見え、校種間を越えた共同する経験を積み重ねることでその意義が見えてくると述べている。さらに、上原(2020)は、児童と大学生が交流することは、他児との交流、他児への援助、活動享受、嫌な出来事の消失、既に身に付けている社会性の維持に有効であると述べている。児童と大学生の交流により、双方に教育的効果が上がることが挙げられている。

令和2年度、同専修においても学生が児童に地域の民謡を指導し、三校合同授業で交流する実践を実施した。3年次の学生が中心となり、児童に指導するために事前学習を通して授業案の作成や授業計画を作成し、三校それぞれの児童を対象にした授業構想や発問・指示の仕方等、相手意識をもって授業を行うことを実践した。児童は、グループごとに大学生から丁寧に指導してもらったことにより、学びに向かう意欲が高まり、民謡を短時間で習得することができた。児童と大学生がコミュニケーションを取りながら学ぶことで学習効果を上げた。しかし、児童と学生が共同で一つの音楽を創作する実践は挙げられていない。ここでは、児童による旋律づくりと学生による伴奏づくりの学習通しての学習効果について実践研究を行った。

## 2 新潟大学音楽教育専修と新潟大学附属長岡小学校の共同研究・共同実践の経緯（平成30年～令和4年）

表1 共同研究・共同実践の内容

	共同研究・共同実践の内容
平成30年度	・卒業研究「小学3～5年生を対象にしたピアノ伴奏とオーケストラ伴奏の比較」（大久保・森下・平出）
令和元年度	・卒業研究実践計画（森下・平出）
令和2年度	・共同研究「長岡地域における郷土の音楽の教材開発」（平出・伊野） ・共同研究「音楽科教育を展望する：コロナ禍における附属学校の取り組みを通して」（伊野・平出・吉村・米山・和田）新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編，巻13，号2，p. 267-289，発行年2021-02 ・卒業研究「児童と中学生の効果的な合唱指導」（伊藤・伊野・平出） ・卒業研究「イギリス式ソプラノリコーダーの有用性と導入指導」（金澤・森下・平出） ・卒業研究「COVID-19禍における音楽授業の工夫」（遠藤・森下・平出） ・合同授業「COVID-19禍における，大学と小学校三校合同による音楽科交流授業」（森下・米山・平出・埴・首藤・伊野・田中）
令和3年度	・共同研究「イギリス（バロック）式ソプラノリコーダーの有用性と導入指導—小学校第3学年での実践—」（平出・金澤・森下） ・日本学校音楽教育実践学会発表「イギリス（バロック）式ソプラノリコーダーの有用性と導入指導—小学校第3学年での実践—」（平出・金澤・森下） ・共同研究「小学校と大学の共同による旋律づくりの実践研究」（平出・森下） ・卒業研究「幼稚園児と児童を対象にしたリトミックの効果」（清水・森下・平出）
令和4年度	・共同研究「児童と大学生の共同による旋律づくり・伴奏づくりの実践研究」（平出・森下） ・卒業研究「小学校音楽科における鑑賞の授業について—体験活動を取り入れた演奏会型授業の提案—」（村松・森下・平出） ・合同授業「大学生によるオーケストラ訪問演奏会」（森下・平出）

### 3 令和2年度の実践

#### 3.1 単元名

「伝えよう！わたしたちのありがとうメロディー」

#### 3.2 児童と単元

##### 3.2.1 本単元で求める児童の姿

本単元では，主旋律と副次的な旋律をつくって2部合唱をする。自分たちの伝えたい思いに合う主旋律をつくったり，多重録音アプリを活用して仲間と旋律の重ね方を考えたりする。このことにより，互いの旋律を聴き合って歌う楽しさを味わいながら，自分の思いに合う音の重ね方で旋律をつくる姿を想定した。

##### 3.2.2 単元の価値

本単元では，自分たちが歌う主旋律や副次的な旋律をつくる活動を行うが，この活動は旋律を重ねて歌う美しさや即興で旋律をつくる楽しさを実感してきた児童にとって，自分たちの思いに合うよう，音楽を形づくっている要素である旋律の重ね方を試行錯誤できる価値がある。また，学年末に予定されているこれまで支えてくれた人に感謝の気持ちを伝える機会とつながり，自分たちの旋律づくりへの思いを高めることができる。その際，旋律の重なりによる曲想の違いを客観的に聴き合ったり，旋律の動きを可視化したりしながら思いを具現することを大切にす。このことにより，伝えたい思いに合う旋律をつくって合唱する姿を想定した。

本単元では，感謝を伝えるオリジナルの8小節の主旋律と副次的な旋律をつくり，2部合唱する。お世話になった人たちに自分たちがつくった旋律を歌って気持ちを伝えたいと意欲を高めた児童は，隣り合う音を中心に8小節の主旋律をつくる。主旋律が歌えるようになると，既習曲のように，副次的な旋律を重ねて歌っ

てみたいと意欲を高めてくる。そこで、「伸ばす」方法、「重ねる」方法の順に副次的な旋律を重ねることができると試す場を設定する。まず、主旋律の一音を「伸ばす」方法で試し、きれいに重なることに気付く。次に、3度下の音を「重ねる」方法を試す。しかし、旋律の動きが同じため、主旋律につられてうまく重ねることができなくなる。そこで、多重録音アプリ（Acapella）を活用し、主旋律に音を重ね、客観的に響きを聴き合いながら歌う活動を組織する。仲間の声を聴きながら音を重ねられるようになると、児童たちはこれまでの学習を生かし、イメージに合う副次的な旋律をつくりたいと意欲を高めてくる。そこで、自分たちの思いを伝えるため、つくりたい歌のイメージに合う副次的な旋律を考える活動を組織する。児童たちはイメージに合う旋律にするためには、音を伸ばして重ねて主旋律を引き立たせることや、同じリズムを重ねて伝えたい言葉を響かせることが大事であると気付く。このことにより、旋律や音の重ね方による雰囲気の違いを感じたり、旋律を重ねて歌う楽しさを味わったりして、思いを具現化する姿を想定した。

### 3.3 単元の見直し

感謝の気持ちを伝える旋律や、主旋律に合う副次的な旋律のつくり方を考える中で、つくりたい歌のイメージに合わせて、旋律の重ね方を変えるとよいことに気付く。主旋律と副次的な旋律を重ねて歌うことができる。

### 3.4 題材計画（全7時間）

表2 令和2年度「伝えよう！わたしたちのありがとうメロディー」 題材計画

	学習活動	留意点
1次	感謝の気持ちを伝えるオリジナルの主旋律をつくろう ①隣り合う音を使って、4小節の旋律をつくろう。 ②つくりたい歌のイメージに合う8小節の旋律をつくろう。	醸成活動 2分の1成人式を前に、10年間の成長を振り返る
2次	主旋律に合う副次的な旋律をつくろう ③主旋律に含まれている音を伸ばして副旋律をつくろう。 ④自分たちの主旋律に3度下の音を重ねて、副旋律をつくろう。 ⑤自分たちのイメージに合う副旋律をつくろう。 ⑥主旋律と副旋律がきれいに重なるように歌おう。	・旋律ボードの活用 ・多重録音アプリ（Acapella）を活用
3次	お世話になった方に、歌で自分たちの「ありがとう」を伝えよう ⑦歌で自分たちの「ありがとう」を伝えよう。	・保護者へYou tubeで配信

### 3.5 対象

新潟大学附属長岡小学校

令和2年度 第4学年1組（35名）・2組（35名）合計70名

### 3.6 抽出児の学びの様相

A児は、自分の考えをしっかりともち、音楽を形づくっている要素を手掛かりに、筋道を立てて追求する児童である。一方で、自分の考えを伝えず仲間の意見に合わせるなど、相手の気持ちを優先する傾向がある。そのようなA児には、自分の考えや歌声に自信をもち、仲間と意見を主張し合いながら協働して音楽をつくる資質・能力のはぐくみを期待した。

2分の1成人式を迎える児童たち。出生から10年間の思い出映像を視聴し、できるようになったこと、支えてくれた人、してもらったことを一人一人が振り返った。温かい雰囲気につつまれる中、A児はほほ笑みながら「『ありがとう』の気持ちを歌で伝えたい。」と発言した。「ありがとう」を伝える楽曲を数曲鑑賞する中で、「どの楽曲も素敵だけど、自分たちでつくってみたい。」と声が上がった。A児も「つくりたい。」と笑顔で話し、歌をつくることへの意欲を高めていた。そこで、順次進行を基本とした4小節の旋律をつくる場を設定した。旋律を可視化した旋律ボード（図1）を活用し、個人で旋律をつくった。A児は、「のびす音を使うとなめらかな感じで、短い音を使うとはずんだ感じになる。仲間とありがとうメロディーをつく

りたい。長い旋律にしたい。」と振り返りに記述し、仲間と旋律をつくることへの意欲を高めた。

ファ									
ミ									
レ									
ド									
シ									
ラ									
ソ									
ファ									
ミ									
レ									
ド									

図1 A児グループの旋律ボード

グループで、8小節のありがとうメロディーをつくる活動を組織した。まず、グループの仲間と伝えたいありがとうメロディーのイメージを膨らませた。「弾んだ感じで、軽やかなイメージ」という仲間の意見にA児も賛同し、ワークシートに記入した。共有したイメージに合う旋律をつくる意欲を高めてきた。8小節の旋律ボードを活用し、グループで旋律をつくった。「『ターアー』の後に、『タン』を組み合わせよう。」という仲間の意見を聞き、A児はキーボードを弾いて響きを確認した。「最後が弾んだ感じになっていいね。」とA児。旋律を歌えるようになると、「『もみじ』のように、ハモる音を入れて歌ってみたい。」と発言した仲間の意見に「入れてみたい。」とA児は深くうなずいた。前單元までの既習内容を生かし、小節の始めの音を伸ばす、3度下の音を重ねて試し歌いをする場を設定した。仲間と副次的な旋律を合わせてみるとA児は「伸ばす旋律ばかりだと合わない。弾んだ感じになるように、2つの重ね方をミックスしたい。」と旋律ボードを動かした。自分たちのありがとうメロディーへのイメージに合わせて、旋律の重ね方を工夫しようと意欲を高めてきた。そこで、追求課題「◎自分たちのイメージに合う副旋律をつくろう。」を設定した。「3小節目の旋律を伸ばして重ねてみよう。」という仲間の案に対して、「歌詞が『ありがとう』だから伸ばすのはもったいないよ。」と首をかじげたA児。伝えたい言葉への思いを込めながら、自分の意見を主張し始めた。3度下の旋律を中心に副次的な旋律を構成し、旋律を聴いてみると「弾んだ感じにならない。」と仲間と共に頷きをつき考え込んだA児。つくりたい旋律と、実際の旋律とのズレを感じたのである。「みんなにアドバイスをもらおう？」という教師の問いかけに、「聞いてみよう。」とグループの仲間を声を掛けうなずいたA児。仲間と聴き合う意欲を高めてきたA児にイメージに合う重ね方になっているか聴き合う活動を組織した。

「弾んだ感じにしたいけど、残念な感じになってしまう。」と同じグループの仲間が伝えると、A児もうなずいた。「弾んだ感じにしたいなら、3度下を重ねて、短いリズムにしたらいい。」という仲間からのアドバイスを聞き、何度も深くうなずくA児。工夫する見通しをもてたと考え、グループ活動を再開した。付点2分音符を、2分音符に入れ替え、休符を入れた副次的な旋律をつくった。A児が「ターアーウンタン」のリズムを弾いてみると、「弾んだ感じになった！」と仲間と顔を見合わせてほほ笑んだ。「こっち（2小節目）も同じように重ねよう。」とはっきり意見を主張したA児（写真2）。よりイメージに近づけたい、という強い願いをもったのである。2小節目も同じリズムに変えて歌うと「弾んだ感じになった。」とA児は満面の笑みで声を挙げた。タブレットPCに録音し、音の重なりを聴いてみると「すごくいい。」と、満足げに微笑んだ。走って譜面台を取りに行ったA児。グループで何度も音が重なるように歌った。旋律がきれいに重なると、「できた！録音しよう！」と、A児は、生き生きとした表情で仲間へ伝えた。

一人ずつ別室で、ありがとうメロディーをタブレットPCに旋律ごとに録音すると、「完成！早く家族に見てほしい。」と目を輝かせたA児。完成した映像（写真2）を公開し、保護者の様子を知ると、「家族が喜んでくれて嬉しい。『ありがとう』が伝わった。他の歌もつくりたい。」と、思いが伝わった喜びを表した。願いを具現できたことに満足し、新たな願いをもったA児の姿である。

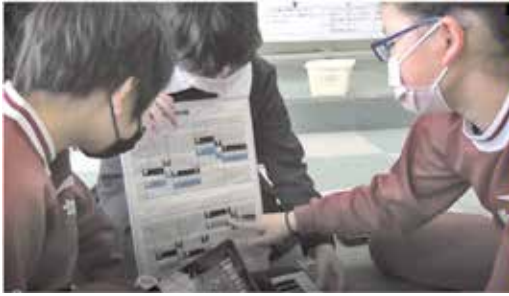


写真1 自分の意見を主張するA児



写真2 多重録音の画像

はずむかんじ (かろやか)  
♩ = 120

譜例1 A児グループの旋律と森下の伴奏

おちつく 美しい やさしい  
♩ = 120

譜例2 Bグループの旋律と森下の伴奏

なめらかで 流れるような感じ

譜例3 Cグループの旋律と森下の伴奏

明るく さわやかで あたたかい

譜例4 Dグループの旋律と森下の伴奏

### 3.7 考察

2分の1成人式（総合的な学習の時間）と音楽科の学びを関連付けたことにより、「ありがとう」の気持ちを伝えたいという思いを高めることができた。さらに、森下から旋律づくりのコツを教授いただいたことにより、専門家のアドバイスを生かそうとする姿が見られた。さらに、森下が伴奏をすることにより、自分たちがつくった旋律がお気に入りの歌となり、気持ちを込めて歌で「ありがとう」を伝える意欲が高まった。総合的な学習の時間との関連、大学との連携により、児童たちの学ぶ意欲や伝えたいという思いが高まることを実感した。小学校と大学の先生との共同授業は、児童にとって価値ある活動となった。本実践では、大学教師が伴奏をつくったが、児童がつくった旋律を、大学生が伴奏をつくる活動を組織することにより、児童にとっても大学生にとっても意欲が高まり、価値ある活動になることが期待される。

## 4 令和3年度の実践

令和2年度の実践「伝えよう！わたしたちのありがとうメロディー」を受け、児童による旋律づくりと大学生による伴奏づくりを共同で実施した。大学生の伴奏づくりが初めてである事、児童の副次的な旋律については、歌唱教材「もみじ」の学習で習得済である事から、児童による旋律づくりは主旋律のみに修正した。児童は自分たちのありがとうメロディーのイメージを大学生に発信し、大学生は児童の思いを汲んでイメージに合う伴奏をつくる活動を組織した。感染対策を講じ、対面での交流は実施せず、写真入りのメッセージをメールで送るなど、できるだけお互いが見える環境をつくるようにした。出来上がったありがとうメロディーと感謝の歌を動画に編集し、YouTubeで限定配信することで、つくった旋律と伴奏、歌っている児童たちの表情や歌声を交流することにした。

### 4.1 実践内容

表3 令和3年度「伝えよう！わたしたちのありがとうメロディー」題材計画

	学習活動	留意点
1次	感謝の気持ちを伝えるオリジナルの主旋律をつくろう ①隣り合う音を使って、4小節の旋律をつくろう。 ②つくりたい歌のイメージに合う8小節の旋律をつくろう。	醸成活動 2分の1成人式を前に、10年間の成長を振り返る
2次	大学生に思いを伝えよう ③旋律の工夫やつくってほしい伴奏のイメージを伝えよう。 ④伴奏に合わせて旋律を歌おう。	・旋律ボードの活用 ・多重録音アプリ（Acapella）を活用
3次	お世話になった方に、歌で自分たちの「ありがとう」を伝えよう ⑤歌で自分たちの「ありがとう」を伝えよう。	・保護者へYou tubeで配信 ・大学生へYou tubeで配信

### 4.2 対象

- ・小学校 新潟大学附属長岡小学校  
令和3年度 第4学年1組（35名）・2組（35名）合計70名
- ・大学生 新潟大学教育学部音楽教育専修  
令和3年度 第2学年（9名）

#### 4.3.1 抽出児の学びの様相（児童E児）

E児は、発想が豊かで自分がつくりたい音楽についてこだわりをもち、粘り強く追求する児童である。生まれてから10年間の成長を動画で視聴すると、「これまでたくさんの人に支えられて成長してきた。家族や友達、先生に感謝の気持ちを伝えたい。音楽の授業で自分だけのありがとうの歌をつくりたい。」と振り返りに記述した。3人グループで、つくりたいありがとうメロディーの雰囲気話し合った際は、「おだやかな雰囲気のありがとうメロディーをつくりたい。」と自分の思いを主張した。「落ち着いた感じもいいね。」という仲間の意見に賛同し、「おだやかに落ち着いた雰囲気にしよう。早くつくりたい。」と発言し、グループの仲間と旋律づくりへの意欲を高めていった。旋律づくりでは、「おだやかな感じだから、伸ばす音をた

くさん入れてみよう。」「最後はドで終わる感じにしよう。」など、つくりたいイメージとリズムを繋げて試行錯誤し、グループの中心となって活動を進めた。「音をだんだん下げたら落ち着いた感じになりそう。」という仲間の発言に、「いいね。次は少しずつ上げてみよう。」と、イメージに合う旋律の動きとを繋げて試行錯誤をしていった。つくった旋律をキーボードで弾いて確認すると「これで完成！歌ってみよう！」と満面の笑みを浮かべた。大学生へのメッセージには「おだやかで落ち着いた気持ちで『ありがとう』を伝えたいので、伸ばす音をたくさん使っておだやかな感じにしました。家族や先生、友達に『ありがとう』の気持ちを伝えたいので、素敵な伴奏をつくってください。よろしくお願いします。」と記述した。大学生から伴奏が届くと、「どんな音楽になったかドキドキする。」とほほ笑み、期待感を高めていた。伴奏を聴くと「思っていた以上にすごく素敵。早く歌いたい。」と目を輝かせた。自分たちの思いに合う音楽をつくって歌うことができ、願いを具現したE児の姿である。

#### 4.3.2 抽出児の学びの様相（児童F児）

F児は、音楽を形づくっている要素とイメージとをつなげ、仲間の意見を取り入れながら追求する児童である。生まれてから10年間の成長を動画で視聴すると、「家族や友達、先生にお世話になったことはたくさんあるけど、自分がして返したことは少ない。ありがとうの気持ちを伝えたい。」と振り返りに記述した。「明るくて楽しい感じの旋律にしたい。」という仲間の意見を受け、「それなら弾んだ感じになるね。」と話し、グループで「明るく楽しく弾んだ雰囲気」に意見をまとめた。旋律づくりでは、「短いリズムを使おう。高い音がいいかもしれない。」など、イメージとリズムを繋げて試行錯誤していた。常に仲間の発言を受け入れつつ、しっかりと自分の意見も主張する姿が見られた。F児のありがとうメロディーへの強い思いがあることが伺える。キーボードを持ち、旋律を動かす度に音を確かめながら納得いくまで試行錯誤を繰り返した。大学生へのメッセージには「感謝を伝える人たちと、楽しい時間を過ごすイメージの伴奏をお願いします。工夫したことは、短い音を入れて楽しく弾む感じを出した所です。おっとりしたような伸ばす音も入れて、のびのびしたメロディーにしました。『ラドレ』を組み合わせて、素敵なメロディーにしました。よろしくお願いします。」と記述した。大学生の伴奏を聴くと「イメージにぴったり。大学生ってすごいね。」と喜ぶ姿が見られた。「この歌を大学生にも伝えたい。」と発言し、感謝を伝える対象を大学生まで広げていった。自分の思いを具現するために、大学生が協力してくれた喜びを実感したF児の姿である。



図2 E児グループの旋律と大学生へのメッセージ



図3 F児グループの旋律と大学生へのメッセージ

## 4.4 抽出児の学びの様相（大学生G）

## 4.4.1 おだやかで落ち着いた雰囲気

譜例5 Eグループの旋律と大学生Gの伴奏

児童がイメージしたおだやかで落ち着いた雰囲気に合うように、優しい音色の和音を使った伴奏を作ることが心がけた。右手は旋律を基にした長調の和音にし、左手は四分音符にすることで穏やかな雰囲気を表現した。また、4小節目で伴奏のリズムを少し変えることで、フレーズの終わりと始まりを表現し、落ち着いた雰囲気を表現した。

## 4.4.2 明るく楽しく弾んだ雰囲気

譜例6 Fグループの旋律と大学生Gの伴奏

児童がイメージした「明るく楽しく弾んだ雰囲気」に合うように、たくさんの音を使って伴奏をつくることを心がけた。右手は旋律に合う長調の明るい音色がする和音にし、左手は8分音符で刻むことで楽しい雰囲気を表現した。また、リズムを4小節目と7小節目で4分音符に変えることで、弾んだ雰囲気を表現した。





写真3 ありがとうメロディーを歌うE児



写真4 ありがとうメロディーを歌うF児

大学生Gは、児童が歌う動画を視聴し、「児童が喜んでくれる姿を見て、伴奏作りに参加できてよかったと思った。同時に、もっと素敵な伴奏を作れるようになりたいと思った。」と、歌いながら動画で笑顔で手を振り喜ぶ児童の様子から、達成感を味わうと共に、より専門的な伴奏づくりへの学習意欲を高めていった。

#### 4.5 児童と学生がつくった共同作品

明るい元気な感じ

譜例7 児童と学生がつくった共同作品③

明るくてはなやかな感じ

譜例8 同共同作品④

優しくてなめらかな感じ

譜例9 同共同作品⑤

大学生がつくった旋律の工夫の一例として、譜例7では「明るい元気な感じ」を出すために、右手のスキップをするようなリズムで明るく元気な様子を表現。譜例8では「明るくて華やかな感じ」を出すために、なめらかだけれど明るい伴奏にすることで華やかさを表現。譜例9では「優しくてなめらかな感じ」を出すために、右手を流れるようなメロディーにすることで、優しくてなめらかな感じを表現したとしている。児童の思いを具現する伴奏にするために、音楽的な知見を活用し創作していることが伺える。

## 5 活動の効果

### 5.1 児童を対象にしたアンケート

旋律づくりを実施した第4学年70名にアンケート調査をした。アンケートの結果は以下の通りである。

- ① 自分たちがつくったありがとうメロディーに、大学生が伴奏をつくってくれる学習は、意欲が高まりましたか。

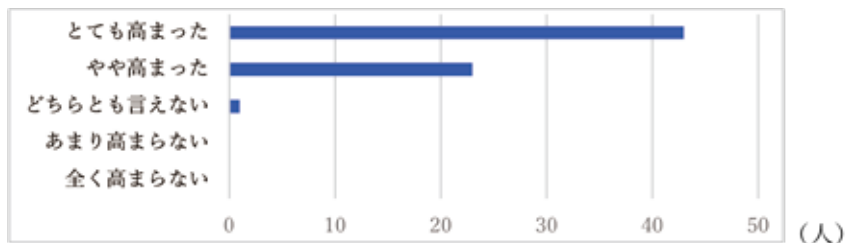


図4 小学生の学習意欲の高まり

- ② 上記回答の理由

- ・自分たちのために伴奏をつくってもらえるので感謝していたら、いつも以上にやる気が出てきた。
- ・大学生と繋がっていると考えると学習意欲が高まった。

- ・自分もつくってあげる側になりたいと思った。
  - ・最後の仕上げを大学生がやってくれて音楽が好きになった。
  - ・自分達ではできない素敵な伴奏をつくってくれて、とても嬉しくなって音楽への関心が高まった。
  - ・自分たちで音符を書いてそれに大学生が協力してくれて、イメージ通りの音楽ができた。
  - ・伴奏を聴いて「大学生ってすごいな」「私もこんなふうになりたい」と思った。
- ③ 大学生がつくってくれた伴奏を聴いたり歌ったりしてどのような気持ちになりましたか。
- ・本当に「ありがとう」の気持ちを伝えられているような気がした。
  - ・自分達のために伴奏をつくってくれたことに感謝した。
  - ・とても嬉しくて、早く親に聴かせたいなという気持ちになった。
  - ・想像していた以上に綺麗な歌になって、とても嬉しい気持ちになった。
  - ・すごく迫力もあったし、聴いていてとてもいい気持ちになった。
  - ・シンプルにつくったものでも一つの曲として完成していて、音楽はすごいなと思った。
  - ・大学生がつくってくれた伴奏は、レベルが高くですごいと思った。
  - ・思った通りの歌になってとても嬉しかった。つくってよかったと思った。
- ④ 今後、大学生と一緒に音楽の学習する機会があったら、どのような学習をしてみたいですか。
- ・一緒に音楽をつくってみたい (28人)
  - ・一緒に合奏をしてみたい (22人)
  - ・一緒に歌いたい (10人)
  - ・和太鼓の曲をつくって演奏したい (2人)
  - ・一緒に弦楽器について学びたい (1人)
  - ・ピアノの連弾をしてみたい (1人)
  - ・音楽を使ったゲームやより楽しめる学習をしたい (1人)
  - ・大学ではどのような授業をしているのか教えてほしい (1人)
  - ・どうやって曲をつくったのか聞いてみたい (1人)

## 5.2 大学生を対象にしたアンケート

伴奏をつくった大学生9名を対象に、児童の旋律に合う伴奏をつくり、実際に児童が歌う姿を視聴後、アンケート調査を実施した。アンケートの結果は以下の通りである。

- ① 児童がつくった旋律に合う伴奏をつくる活動は、制作意欲が高まりましたか。

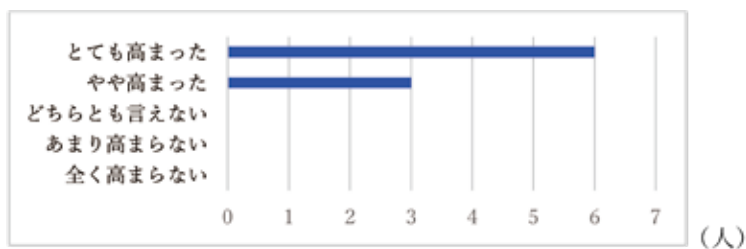


図5 大学生の学習意欲の高まり

- ② 上記回答の理由を教えてください

- ・自分の制作により喜んでくれる相手がいる、その相手が実際に見えると活動が楽しくできた。
- ・誰がつくったのか、顔や名前が明かされていたため、精一杯つくろうという意欲が湧いた。
- ・誰かのために制作するという事で、その人たちのことを思いながら楽しく作曲できた。
- ・簡単な旋律だった為、伴奏が考えやすかった。
- ・児童のテーマ「ありがとう」が素敵で、目的がはっきりしていたのでその目的に合った温かい雰囲気伴奏をつくろうと意欲が高まった。

- ・児童がつくってくれた旋律の意図を汲み、児童のことを考えながら伴奏をつくるのはとても楽しかった。
  - ・児童との関わりがそれまであまりなかったため意欲が高まった。
  - ・自分の能力を活かして伴奏をつくり、児童に喜んでもらいたいと思った。
  - ・イメージを伝えられて制作するのは初めてだったので、喜ぶ顔を想像してつくるのが楽しかった。
- ③ 児童のイメージに合う伴奏づくりで苦労したことがあったら教えてください。
- ・作曲の知識が乏しいため、音の並びが合っているかが不安になった。
  - ・児童の曲に対する思いと、旋律の曲調が異なった場合、どのようにして思いに近づける伴奏にすれば良いか考えながらつくることが難しかった。
  - ・和声法が分からなかった。
  - ・特になし（6名）
- ④ イメージに合う伴奏づくりで意識したことはどんなことですか。
- ・「明るい」「はねる感じ」などのイメージが、旋律のどこに繋がっているのかを考えて、そのイメージを強調する伴奏を付けた。
  - ・右手のスキップをするようなリズムで明るく元気な様子を表現した。なめらかだけれど明るい伴奏にすることで、華やかさを表現した。右手を流れるようなメロディーにすることで、優しくなめらかな感じを表現した。
  - ・児童の思いに合うだけではなく、子どもたちに面白いと思ってもらえるような伴奏をつくった。
  - ・旋律の動きや、元気な感じ、なめらかな感じなど、イメージに合うように伴奏を工夫してつくった。
  - ・児童のメッセージを見て、思いを表現できるように意識した。
  - ・明るいイメージの場合、ずっと同じ流れではなく様々な曲調をイメージしてつくることを意識した。
  - ・イメージに合うよう旋律をつくることを最も意識した。あまり複雑な伴奏でないようにできるだけシンプルな伴奏にした。
  - ・元気な感じを出すために音の動きを大きくしたり、おだやかな感じにするためにスラーを用いたりするなど、それぞれのイメージに合うような適切な音楽表現を工夫した。
  - ・どんな伴奏ならどう聴こえるのか考えながらつくった。楽しいイメージには、スタッカートや付点のリズムを付けた。
- ⑤ 自分がつくった伴奏で歌う児童を視聴して、感じたことや気付いたこと、感想等。
- ・「ありがとう」と言う気持ちがよく伝わってきて幸せな気持ちになった。
  - ・自分も慣れないながらに頑張ったので、一緒に演奏できたようで嬉しかった。
  - ・複雑にしてしまい、歌いづらいと思った。
  - ・自分の考えた伴奏で曲が完成し、児童と一体になった感じがして嬉しかった。
  - ・児童が喜んでくれる姿を見て、伴奏づくりに参加できてよかったと思った。同時に、さらに素敵な伴奏をつくることができるようになりたいと思った。
  - ・自分がつくった伴奏に合わせて歌っている様子を見てとても嬉しかった。直接の繋がりはなくても、音楽を通して気持ちを共有できている気がして嬉しく感じた。
  - ・自分がつくった伴奏を実際に歌っている児童を見て、授業の一環に携われて嬉しく思った。また、児童達も自分達がつくったメロディーに伴奏が付くという事はワクワクする事なのではないかと思った。
  - ・児童がつくった旋律と自分がつくった伴奏が合わさって一つの曲になっており、物理的には離れていても一緒に曲を創作でき、とても嬉しい気持ちになった。
  - ・喜んでる顔が嬉しかった。感想を聞いて、再度練り直してみるのもいいと思った。
- ⑥ 児童の伴奏づくりをしてみて、成果と課題を教えてください。

**【成果】**

- ・児童が作りたがる雰囲気合う伴奏をつくることができた。（2人）
- ・伝えられたイメージに合う伴奏にしようと努力できた。
- ・児童が喜んでくれたことと、新しい事にチャレンジしたこと。
- ・自分の能力を用いて児童と音楽活動ができて楽しかった。ただ伴奏をつくるのではなく「イメージに合

た」伴奏にするため試行錯誤し、自分の伴奏づくりの能力も高められた。

- ・創作の経験が少なかったので、良い経験となった。
- ・自らの音楽的な知識を確認し、実践に生かすことができた。

#### 【課題】

- ・作曲の知識が乏しいため、今後更に学びを深めたい。(4人)
  - ・単調な伴奏となってしまったため、音楽的な伴奏ができるように勉強したい。
  - ・イメージに合った伴奏にするため工夫したが、2曲とも似たような雰囲気伴奏になった。またこのような伴奏づくりを行い自分の能力を高めたい。
  - ・和声法などをもっと学んで、より素敵な伴奏をつくりたい。
  - ・たくさん伴奏をつくる機会が欲しい。
  - ・児童が音の取り易いコード進行について考えていきたい。
- ⑦ 今後、児童と大学生が共同で実施できる音楽授業は、どのような活動ができそうですか。
- ・実際に歌唱などの演奏で表現を創意工夫する活動
  - ・共同で演奏するなど、実際に生の演奏をする
  - ・アンサンブル、オーケストラをバックに合唱
  - ・訪問演奏や楽器紹介、楽器体験、一緒に音楽を通して遊ぶ
  - ・大学生の演奏と、児童の演奏で一緒に音楽をつくる
  - ・この伴奏づくりに加え、大学生が学校に赴いて伴奏を演奏し、児童が鍵盤ハーモニカやリコーダーなどでメロディーを演奏し、合奏する
  - ・児童が詩をつくり、大学生がそれに合ったメロディーと伴奏を創作しみんなで歌う活動
  - ・児童がメロディーを歌唱し、大学生がハモリや伴奏を演奏する

## 6 考察

小学生の旋律づくりと、大学生の伴奏づくりの実践後のアンケートから、双方の学習意欲の向上が示唆された。小学生は、自分の思いに合う伴奏を大学生がつくってくれる喜びと期待、大学生は、小学生が喜ぶ姿を想像しながらイメージに合う伴奏づくりに取り組んだ。いずれも相手意識が生まれ、対面でなくても互いを思い、感謝する意識が醸成された。小学生は、2分の1成人式に向けて、これまでお世話になった方として挙げていた人以外に、大学生にも歌で感謝を伝えたいと意欲を高めた。さらに、伴奏を聴いて願いが具現して喜ぶと共に、自分も伴奏がつけられるようになりたいと憧れをもつ児童もいた。大学生は、小学生のイメージに合う歌いやすい伴奏をつくるため、イメージと音楽を形づくっている要素と繋げて試行錯誤する姿が見られた。児童が歌う姿や喜ぶ姿を動画で視聴したことにより、大学生の達成感につながり、新たな学びへの意欲を高めた学生が多い。大学生の伴奏づくりの成果として、経験値が増え能力が高まった、雰囲気に合う伴奏をつくることができたなど、満足度の高い伴奏づくりができたことが伺える。課題として、経験の少なさによる知識不足を挙げている学生が多かったが、この経験により今後さらに学びを深めていく意欲が高まっている。音楽科教員を目指す学生が実践を通して、児童を意識して伴奏づくりを行うことにより、音楽的な能力を高めると共に、学びを深める意欲を高めることに繋がった。

## 7 総括

この活動は児童大学生双方にとって意味がある。まず児童が自身の作品をより具体的な楽曲として聴くことができるようになる。音楽では単純な節といえども、例え作者が意識しようとしまいが、厳格な規則、いわば「文法」に則って作られている。「文法」から逸脱した音では聴取者は音楽ではなく雑音を聴くことと感じるだろう。例えば、現代では名曲の一つとしてしばしば演奏される、ストラヴィンスキー作曲「春の祭典」は現代の我々からはダイナミックな名曲で、演奏側も難易度の高い曲かではあるが、プロであれば特に問題なく普通に演奏する。しかし、初演当時は大荒れだったと記録されている。他にもドビュッシー作曲「牧神の午後への前奏曲」なども発表当時は否定的な評価だったという。それは聴取者が知らない音楽の規則「文

法」によって作られた曲であったから他ならない。聴取者がその「文法」を感覚として理解してくると、その曲が本来持っている魅力の理解が進み、名曲として確たる地位を築いた。そしてその「文法」の感覚は音楽を理解する上で必然である。児童における音楽学習の大事な点は、正にこの「文法」の感覚を身に付けることである。よく、演歌は好きだがクラシックは好まないという大人がいるが、この人は演歌の「文法」は理解しているが、クラシックの「文法」は十分理解していないということがいえる。つまり、小学校における音楽の授業はこの「文法」の感覚をどれだけ身に付けたかと言うことが、その後の児童の音楽生活に大きく影響することになると思われる。

他方、ここでの大学生は音楽教育のプロを目指しているものであり、「文法」の感覚を身に付けるだけでは不足である。しっかり音楽構造を見極める力が必要となる。どんな音楽も厳格な規則「文法」がある。つまり使っている音と悪い音が厳然としてある。例えば、最も一般的と思われる長音階で作られた曲は、背景に和音（コード）進行があり、その和音構成音と非和声音で旋律が成り立っている。非和声音を含めると12音全て使用出来るが、非和声音の使用方法に則って使う必要がある。しかも、児童の作品は長音階I, IV, Vで解釈できる旋律を作っているとは限らない。場合によっては複雑な和音や借用和音などで解釈する必要がある。そういう点では音楽を専門とする学生にとっても決して易しいものではない。しかしながら、大学生は自身の専門性を生かした楽曲の構築は、鑑賞や音楽づくり（創作）以外の指導にも必要不可欠なものである。これは音楽を専門とした大学生にとっても大事な学びであるといえる。

ここでの活動は試行的要素が強かったが、今後はこういった活動を通常の活動に組み込んで行って行く必要がある。

## 引用・参考文献

- 持田京子・金子智昭・林真麻(2019)「児童と大学生の地域連携について—児童と保育を学ぶ学生が連携することの意義について—」埼玉純真短期大学研究論文集第12号PP.79-88
- 上原美子(2019)「児童と大学生の異年齢交流が児童の社会性に与える影響—児童教室における実践的検討—」埼玉県立大学研究開発センター年報第3巻PP.24-25
- 森下修次・米山陽子・平出久美子・埜丈昌・首藤雅子・伊野義博・田中幸治(2021)「COVID-19禍における、大学と小学校三校合同による音楽科交流授業」新潟大学教育学部研究紀要第13巻第2号PP.271-281
- 平出久美子・伊野義博(2021)「長岡地域における郷土の音楽の教材開発」新潟大学教育学部研究紀要第13巻第2号PP.291-304
- 平出久美子・金澤伊織・森下修次(2022)「イギリス（バロック）式ソプラノリコーダーの有用性と導入指導—小学校第3学年での実践—」新潟大学教育学部研究紀要第14巻第2号PP.283-293
- 新潟大学附属長岡小学校教育研究紀要PP.43-44「伝えようわたしたちのありがとうメロディー（第4学年音楽科）」(2021)